岡山県学校給食会会報

県学給だより

令和５年度における
学校給食用物資の動向予測について

令和元年度３月に新型コロナウイルス感染症を踏まえ、全小・中・高・特別支援学校等の休校要請が発信され早３年が経過する、令和４年度末を迎えることになりました。

その間、コロナ株も変化を繰り返し何度も「ピーク」という言葉を聞き、現在８波との情報も入ってきます。このような状況の中、食材、食品の値上がりが止まる気配すら感じられません。

令和３年度秋口から食料品の値上げが始まり、４年度３学期までに再値上げ、再再値上げ、再々再値上げと、上昇気流に乗ったかのような状況であると感じ、なかなか下降する態勢には入れないのかなと考えられます。

値上がりの理由については、昨年度の本誌「№250号」で伝えた状況に加え、ロシアのウクライナ侵攻による小麦粉の国際相場の上昇等、新たな要因が加わったことも見逃せません。

国内で大きな影響が出たのが、学校給食には欠かせない学校給食用牛乳の年度中途での値上がりであり、過去になかった状況を令和４年度初めて経験することとなりました。

なお、現在の諸問題にも食料品に係る値上がり要素を見逃せません……

◎　防衛力の抜本的強化に伴う増税

◎　相対的に立場が弱く賃金も低い非正規雇用労働者の賃上げ待遇改善

◎　日銀総裁交代による「異次元金融緩和」の維持か？　軌道修正か？　など

今後の物価動向について、値上がるか？据え置きか？あるいは……？　非常に判断が難しい状況です。

ただし、市販向け食品については、既に２月当初から値上げが続いている状況です。また、価格据え置き優先で内容量を小型化する実質値上げが進んでいるのも見逃せないところです。

学校給食用食材価格の新年度からの値上がりは必至です。

このような状況の下、令和５年度の価格動向を予測するのは極めて困難なことではありますが、本県学校給食会が収集した範囲内で情報提供いたします。

令和５年度の学校給食費の見直しと予算建て材料として役立てていただければ幸いです。

１　基本物資
（パン・めん・精米・米飯・米加工品等）

⑴　学校給食用小麦粉

輸入小麦の政府売渡価格は、価格変動制（年２回、４月期・10月期）を導入している。

売渡価格は、改定ルールに基づき、輸入小麦の直近６か月間の平均買付価格を基に算定している。（穀物の国際相場、海上運賃、為替等の動向を反映した買付価格）

小麦の買付価格の急激な変動の影響を緩和するため、今般、緊急措置として、通常６か月間の算定期間を１年間に延長して平準化することとし、その間、令和４年10月期の政府売渡価格は令和４年４月期の価格を適用し「据置き」となった。

今後の為替動向、国際情勢、小麦の作柄、産地の天候要因などによって価格の傾向は変化するとみられるが、現状では全体的に上昇傾向が続くとみられる。

国内産麦については、令和４年産と令和５年産の価格を勘案し、輸入麦の価格改定と連動した事後調整により決定されるため、価格上昇が見込まれる。

これに基づき、３月に県内の製粉工場３社による指名競争入札を実施し、学校給食用小麦粉価格（強力粉・中力粉）を決定することとなる。

ア．学校給食用米粉パン

パンは県産米粉20％を配合した「米粉パン（岡山っ子こめこパン）」を供給している。

No.260
令和５年２月10日
編集発行

公益財団法人　岡山県学校給食会
〒702-8026　岡山市南区浦安本町 59 番地の４
TEL 086-263-6465（代）
URL：https://www.ogk.or.jp/

原材料である強力粉、米粉、砂糖、ショートニング、脱脂粉乳は値上げの見込みである。

原材料、加工賃を合わせたパン価格は、値上げが予測される。

イ．学校給食用米粉めん、うどん

ソフトスパゲティ式めん、中華めんは県産米粉を20％配合した「米粉めん」を供給している。

原材料（強力粉、米粉）、加工賃（グルテンを含む）を合わせた米粉めん価格は、原材料の高騰により値上げが予測される。

うどん価格も値上げが予測される。

⑵　学校給食用米穀等

岡山県の令和４年産水稲の作柄（農政局12月９日公表）は、６月下旬から７月上旬に高温、多照で推移したものの、９月上旬及び10月上旬の日照不足により、作況指数は99（南部98、中北部101）の「平年並み」となった。

ア．学校給食用精米

４年産新米価格（04年11・12月～）は、コロナ禍の影響に伴う市場の過剰在庫が解消されたことにより、下落していた玄米価格が上昇に転じ値上げとなった。

新年度価格（05年４月～）は、２月末頃に米穀取扱業者、精米工場と価格交渉して決定するが、昨年同時期と比べ、値上げの見込みである。

イ．委託炊飯（米飯）

３年産米に比べ、４年産新米価格は値上げとなったため、年度当初と比べて新米炊飯価格は、値上げが予測される。

加工賃と合わせた炊飯価格は、光熱費等の高騰により値上げが予測される。

ウ．米加工食品

アルファ化米は、うるち米の価格上昇等により値上げが予測される。アルファ化赤飯は、もち米価格に大きな変動はないものの、光熱費及び包装材料の高騰により値上げが見込まれる。

エ．強化精麦・強化米

強化精麦（強化白麦、切断無圧ペン精麦）価格は、燃料費及び包装材料の高騰により値上げが見込まれる。

強化米価格は、原料価格の上昇により値上げが見込まれる。

2　学校給食用牛乳

乳価については、原油価格や輸入飼料の高騰等により県内酪農家の生産コストが急激に上昇したため、令和４年11月に期中値上げがあったが、値上げ分は県からの補助金で賄ったので、保護者負担額は据え置きとなった。しかし、補助金交付は令和５年３月分までとなっており、加えて乳業者の製造・輸送コストの上昇などの要因もあるため、令和５年度の保護者負担額は大幅な値上がりが予想される。岡山県の令和５年度の牛乳価格は、１月に各供給乳業者から見積を徴収し、３月に国からの補助額が決定され、県内平均供給価格（保護者負担額）が算定される。

3　常温物資

⑴　食用油

原料大豆は、主要産地のブラジル・アルゼンチンでのラニーニャ現象の影響による生産量の減、ウクライナ情勢の悪化に伴う穀物・油脂の供給不安により、相場は高騰し高止まりとなった。また、原油価格高騰によるエネルギー、包装資材コストの上昇、急激な円安の進行による輸入コストの上昇により、製品価格は引き続き、高止まりが予想される。

こめ油は、原料である米糠は、国内の米の消費量減少に伴い、生産量の減少が続いており、在庫も少なく、国産原料の確保は厳しい状況である。外国産原料の輸入も行っているが、輸入コストの上昇が続き、高値で取引きされている。このような状況で、製品価格は高値安定が予想される。

⑵　砂糖

原料粗糖の相場は、令和２年の春先から上昇し、令和４年に入ってからも依然、高い水準で推移し、また、急激に円安が進み、工場のエネルギーコスト、包装資材、物流費の上昇が続いており、今後も昨年同様に高値安定、もしくは、さらなる値上がりもあると予想される。

⑶　乳製品（バター、チーズ）

各種乳製品の値上げは、昨年から継続的に行われており、エネルギーや包材、物流費などあらゆるコストの高騰が要因で、需要は減退傾向である。このような状況の中、大手乳業各社では、酪農経営改善と生産基盤維持の観点から乳価引き上げの動きがあり、製品価格への転嫁が進むと考えられ、価格は値上がりが予想される。

⑷　缶詰

ア．みかん缶（国産）

令和４年度の温州みかんの生産量は前年比の98％と予測される。近年は、みかんの園地が減少し、品不足が続いているため、青果の需要が増え、低品質な青果でも市場では高価格で取引きされており、加工用原料の入荷は困難な状況となっている。また、海外グレープフルーツが不作で、みかんの青果市場への動きが活発になり、加工向け原料にも影響を及ぼすと考えられる。製造を取り巻く環境は、エネルギーコストが昨年の約２倍以上で副資材の高騰も拡大しており、新物価格は値上がりが予測される。

イ．たけのこ缶（岡山県真備産・国産）

真備産たけのこは、令和５年は裏年にあたる。根の張る秋口の天候は良く、収穫時期に雨が降れば生育は良いと思われる。しかし、収穫農家の高齢化により生産量は減少しており、また、人件費、エネルギー、資材の価格が大幅に上昇する中で価格への転嫁は必至で、製品価格は値上がりすると思われる。

九州産たけのこについても、令和５年は全体の

生産量で見ると裏年になり、原料相場が上がると予想される。また、昨年産の在庫持越しがほぼ無く、さらに運賃の値上り、製造コストの上昇もあり、製品価格は値上がりが予想される。

ウ．パイン缶（タイ産）

タイの令和４年産のパインは令和３年同様コロナの影響により人手不足を余儀なくされ、多くの工場が通常生産能力の約50％となった。原料は天候異常もなく順調に生育し、収穫量は昨年の約18％の増となったものの、タイの最低賃金の上昇、空缶代の上昇、円安の影響もあり、輸入コストは上昇しているため、製品価格は値上がりが予想される。

エ．うずら卵水煮（国産）

配合飼料価格は、年々高騰が続いており、令和４年12月現在で前年同期比約30％上昇している。さらにエネルギー費、運賃、人件費、ダンボール、空缶などがさらなる値上げとなる見込みで、製品価格への転嫁は避けられず、値上がりが予想される。

オ．ツナ缶

令和４年１月～12月の焼津港での加工用のマグロの水揚げ実績は、6,881トン（令和３年１月～12月10,240トン）と令和３年の67％に減少した。さらに、大型サイズの水揚数量が減少した事により、中小型魚が値上がることになり、価格はキロあたり210円（令和３年の129％）と値上がりした。加工用の中小型魚の割合も減少しており、原料価格は高値で推移している。令和３年と同様に製造工場の人手不足もあり、一次処理を行った原料を輸入する割合が増えており、その分、原料価格が上がるため製品価格も高止まりしている。世界的にマグロの水揚量が減少しており、令和５年度に関しても回復基調は見られず、製品価格は、さらなる値上がりが予想される。

⑸　乾物

ア．岡山県産乾椎茸

主要産地である岡山県北部の山間部は令和３年12月末から令和４年１月にかけて雪に覆われて寒い日が続き、原木しいたけの発生条件である「低温刺激」と除雪による水分補給がしっかりと有ることから生育は良好であった。しかし、令和５年１月に入り降雪もなく３月上旬を思わせる温かい気候となり、低温刺激が少なく生産量の減少が心配される。また、製造工場においては、加工費や運賃が上昇しており、生産量が順調であっても経費の増加は避けられず、価格については、値上がりが予想される。

イ．生わかめ

新物わかめの生産は、三陸、岩手・宮城両県とも11月末頃まで海水温の高い状況から生育遅れの懸念があったが、12月以降寒波の到来により、一気に海水温が下がり、順調な成育状況にある。また、鳴門産についても同様に順調な生育が続いているが、製品製造コストは上昇しており、全体的に価格は値上がりが予想される。

ウ．海苔

国産海苔の生産は令和３年度全国生産量64億5,500万枚に対して、令和４年度は63億7,200万枚と前年比98.7％に減産した。現在国内の年間総需要量は約80億枚と云われており、不足分は繰越在庫と韓国、中国からの輸入海苔が約15億～20億枚輸入されて国内需要に対応している。昨年に引き続き、コロナ禍での巣ごもり需要の高まりにより、不足気味の状況で新海苔の生産を迎えた。新海苔は１月現在で、全国生産数は約12億3,989万枚と前年同期生産数16億8,154万枚を下回っており、特に九州地区の生産数量は前年比55％と大幅に減少し、既に平均価格が上昇している。例年３～４月まで収穫が続くが、降雨不足による栄養塩不足から色落ち現象が始まっている地区があり、今後適度な降雨がなければ、一気に色落ちが拡がると懸念され、生産終了が早まる可能性がある。このような状況から今後適度な降雨も無く海苔の生産に適した気象状況にならなければ、全国的に減産となり、価格は値上がりが予想される。

エ．煮干

令和４年度の瀬戸内海地区における生産は、香川県伊吹島・観音寺地区では中荒羽～大羽サイズは良質の物が減漁となった。中小羽～中羽サイズは漁が継続してあったものの油物で魚質が悪く、９月初旬で漁を終了した。その後、広島・愛媛・山口での漁は継続されたが、各地とも魚質は良くならず、10月初旬頃になり、ようやく広島で中小羽～中羽サイズでやや良質な物が獲れたが漁獲量は少なく、大半は油物で良質品が少ない年となった。この傾向は、本年の新物生産が始まる６月～７月頃まで続くと考えられ、価格は値上がりが予想される。

4　畜産物

⑴　学校給食用輸入牛肉（オーストラリア産）

令和４年の豪州の牛肥育頭数は、令和３年とくらべ増えているが、生産者は、まとまった雨が降ったことで餌となる草が多くなり、更なる増体を目指し、出荷しない農家が増えたため、価格が高騰している。

現在、働き手が不足しているが、政府が外国人労働者確保に向け対策しており徐々に生産量は増える見込みである。しかし、アメリカが干ばつ等により減少した牛を取り戻そうとする動きがあり、アメリカの不足分を補う国々で世界的な牛肉不足は解消されていない。買い付けについても、輸送コンテナ・輸送船不足による遅延入荷が続き、市場に流通できなくなり、価格面への影響が出ると思われる。また、為替も円高基調はみられるが、価格は下がらず、高値安定もしくは更なる値上がりが予想される。

⑵　国内産牛肉

コロナ禍・円安・ロシアのウクライナ侵攻によ

る影響などから、飼料・燃料等の高騰で価格を上げざるを得ない状況である。高値から消費は進んでいないが、国産牛の頭数は減少傾向のままで価格を下げるに至らない。和牛はコロナ感染拡大の影響と思われるが年末の消費が進まず苦戦している。また、輸入物の高騰により価格は下がらないと考えられる。

堅調なのは交雑種で、国産牛の高騰、和牛の低迷で和牛・国産牛の代わりとして需要は高まっている。需要の高まりは価格の上昇につながり、全体的に高値安定は避けられないと予想される。

⑶　豚　肉

輸入チルドの価格高騰が続いており、国産への代替えが進み、昨年は大幅な高騰・品薄で特売できないことから需要が減少。

輸入チルドは為替・飼料不足・輸送費高騰の影響がまだ続くと思われることから、少しでも安いヨーロッパ産に移行しており、高いチルドから冷凍への移行もされている。そのため、国産の需要は緩和されると思われるが、飼料・燃料の高騰は農家を直撃しており、安価で出せない状況となっている。肥育頭数は昨年並みと思われるが、高値安定は避けられないと予想される。

⑷　鶏　肉

令和４年の国産鶏の生産状況は、令和３年に引き続き各産地の生産意欲は高く、ブロイラー処理羽数は増加したが、相場は、新型コロナ感染症による内食需要の増加や輸入鶏肉の品不足、円安による価格高騰により、国産鶏肉への引き合いが強く、過去に例を見ない高い水準で推移した。また、鳥インフルエンザの発生が例年にない速さで全国各地に広がり、殺処分による羽数減少により、市場における供給不足が相場の上昇に影響した。製造工場では、飼料及び燃料費・電力費の急激な高騰と恒常的な人手不足が続いており、今後の鳥インフルエンザの広がりの懸念もあり、価格を下げる要因は少ないと思われ、高値安定が予想される。

⑸　鶏　卵

令和４年当初の鶏卵相場は、生産調整が進んだこともあり、１月～４月にかけて徐々に上昇し、新型コロナの警戒感の薄まりから外食需要が好調で、さらに相場を押し上げた。また、10月に岡山県で鳥インフルエンザが発生し、その後も全国的に過去最悪のペースで多発したため、急激に相場は上昇した。鶏卵生産環境は、穀物・原油高、円安などによる様々なコスト上昇により生産者にとって厳しい状況は続いており、販売価格への転嫁が想定される。また、鳥インフルエンザの感染拡大が懸念され、価格は値上がりが予想される。

5　冷凍物資

⑴　水産物

ア　キハダマグロ

日本国内のマグロの主な水揚港である、静岡県焼津港の令和４年巻き網漁のキハダマグロ漁獲量は、6,881トンとなり、令和３年の１万240トンを大きく下回る結果となった。このような状況の下、価格も上昇し、加工用の中小型魚については昨年比129％の210円/kgと高値で推移した。世界的に見ても令和４年の水揚げ量は減少しており、引合いが強く、輸入原料も価格が上昇している状況。この状況は令和５年も引き続き継続する見込みで、さらなる価格上昇につながる可能性がある。このことから、令和５年度も引続き国産、輸入原料共に高値安定と予想される。

イ　紫いか・するめいか・アメリカオオアカイカ

北太平洋で漁獲される紫いか漁は、三陸沿岸で行われる冬漁（１～３月）と三陸から遥か離れた沖で行う夏漁（６～８月）の２回に分かれており、令和４年の冬漁は、約200トンの水揚げがあり、全くなかった前年と比べると良かったが、夏漁は令和３年の約6,900トンに比べ半数の約3,670トンとなった。価格については不漁に加え「するめいか」や「ヤリイカ」の不漁、高騰が影響し、紫いかが今まで使用されていなかった寿司ネタへ転用されたこともあり、浜値は900円/kg超まで跳ね上がり、令和３年の２倍以上となった。令和５年度も引き続き不足の状況が続き、価格については高値安定と予想される。

三陸・北海道で水揚げされるするめいかは震災以降の不漁の状況に変わりなく、令和４年も同様に不漁となり、令和３年の約１万８千トンを下回る結果となった。価格も依然高値で推移しており、令和４年の価格は前年比108％の約700円/kgとなり、不漁が続く中、一部の加工メーカーではスルメイカからアルゼンチンやチリ産のマツイカに切替えを行っているが、原料の大半を塩辛や珍味を製造しているメーカーが確保しているため、冷凍加工業者にとって確保できていない状況は今も続いている。したがって令和５年度も不足の状況が続き、価格も高値安定と予想される。

ペルー産アメリカオオアカイカの漁獲量は、令和４年の９月末時点で令和３年の半分程度だったため不漁となる見込みであった。その後、普段あまり漁獲されない11～12月にまとまった漁獲があったことから少し回復したが、結果的に数量は令和３年の約14万トンを下回る結果となった。価格は９月までの不漁が影響し高値で推移したが、年末の漁獲量増加、中国の春節（旧正月）向け需要の低調などの要因により、一時的に浜値が下落した。令和５年１月は水揚げが不調に転じており、中国のゼロコロナ政策の緩和による需要回復があったため、価格は再び上昇している。令和５年度の価格は為替の影響に左右されるため予想が難しいが、工場の生産コスト増が影響し、強含みが予想される。

ウ　むきえび

令和４年のインド産養殖エビの状況は、中国・アメリカからの買付量減により、価格はやや弱含みでしばらく推移した。しかし、ゼロコロナ政策を緩和した中国が年末ごろから買付を再開したた

め、価格が上昇する可能性が出てきた。一方現地では、稚エビや餌、燃料費など養殖コストが上昇した中、浜値が生産者の思うように上がらなかったことが長く続いており、生産意欲が低下しているとの情報があることから、令和５年の水揚げは令和４年よりも少なくなることが予想される。令和５年の価格は為替や他国の買付状況など様々な要因に左右される可能性もあるが、先述の漁獲量減、現地生産コスト増が影響し、強含みが予想される。

エ　いわし

令和４年の北海道巻網マイワシ漁は、10月31日に終わり、漁獲量は前年と比べ約４％減の約22万５千トンであったが、４年連続で20万トンを超えた結果となった。魚体サイズは小型中心で、飼料や肥料となる原料が約９割を占め、養殖で使用する飼料が値上がりしたことにより、価格は前年比113％の45円/kgとなった。令和５年の価格は、極端な小型比率が改善されなければ引き続き高値安定と予想される。一方、境港で水揚げされるマイワシの令和４年漁獲量は、令和３年と比べ300トン増の３万8,841トンであった。令和４年の価格は206円/kgとなり、令和３年の189円/kgと比べ上昇した。上昇の要因の一つとして他の魚種（さんまなど）の不漁から、需要が上がったため。サイズは北海道と同様小型が多く、今後もこの状況は続くと思われる。令和５年度の価格は主な漁期である３～６月の状況によるが、高値安定が予想される。

オ　さんま

令和４年の全国漁獲量は、前年比２％減の約１万８千トンと４年連続で過去最低を更新し、サイズも小型のものが多かった。漁獲量減少については様々な原因が考えられているが、その１つとして北海道よりさらに北の北方４島海域での操業ができなかったことは令和３年と比べ大きく変わったところである。卸売価格は575円/kgと昨年より約７％下がったが、６年前と比べると約５倍となっている。令和５年の価格についても資源の回復、漁獲量増加が見込めず、高値安定、品薄状況が続くと予想される。

カ　シロサケ（秋サケ）

令和４年の北海道の漁獲量は、10月末時点で前年比136％の約６万800トン、岩手県では前年比45％の約500トンとなり、北海道では増加、岩手県では減少した結果となった。北海道、岩手県共に漁獲されたサイズは小型であり、浜値は北海道では前年比90％の767円/kg、岩手県では前年比70％の792円/kgと前年を下回った。令和５年については令和４年とは異なる群れの来遊となるため、同じように漁獲される可能性は低いと考えられる。また、加工コスト増も影響し、引き続き高値安定と予想される。

キ　くじら

現在、日本は国際捕鯨委員会から脱退し、令和元年７月から南氷洋・北西太平洋での調査捕鯨を止め、領海及び排他的経済水域内で商業捕鯨を開始した。令和４年度の商業捕鯨における捕鯨枠は349頭であり、内訳はイワシクジラ25頭、ニタリクジラ187頭、ミンククジラ137頭だった。その中で全国的に流通される鯨の大半は日本の沖合で操業される船により捕鯨されるニタリクジラとなり、学校給食用として供給される鯨もこのニタリクジラとなる。価格は、原油価格上昇に伴う原料価格の上昇、加工工場での生産コスト増が影響し、しばらくは高値安定と予想される。

⑵　農産物

ア　コーンカーネル（北海道産）

令和４年の帯広管内（士幌町、音更町）の作柄は、７月の日照不足、８月の降雨が影響し、短軸傾向のものが多く見られ、生産量は平年の約８割となった。価格は、出荷量減により引き合いが強くなっていること、栽培コスト増など様々な要因により高値で推移しており、この状況は新物出荷が始まる９月頃まで続くと予想される。

イ　里芋（九州産）

主要産地である宮崎県の作付面積は、令和４年は前年対比約90％、生産者数が前年対比約80％となり、作付面積、生産者数共に減少傾向となっている。原因は、生産者の高齢化、種芋不足、疫病（主にベト病）の発生による収量の減少及び品質の低下などに伴う価格の低下が影響し、生産者の里芋離れが進んでいる。また、収量（重量）を確保するため、生産者が収穫時期を遅らせ、大きくなった里芋を収穫することとなり、大玉傾向が進んでいる。そのため、以前は丸型（Ｓ・２Ｓ）サイズに加工することに適したものが全体の約半数あったが、令和４年も含め近年では２割程度となっており、作柄にもよるが、今後は丸型の数量確保が難しくなる可能性がある。令和５年の価格は、農業資材や肥料関係の高騰、人件費や原油、光熱費の上昇など様々な要因が影響し、高値安定と予測される。

ウ　ほうれん草（九州産）

令和４年に収穫された九州産ほうれん草の作柄は、10～12月中旬まで温暖な気候に恵まれ、前年と比べ収穫量は大幅に増加した。しかし、12月下旬の急激な冷え込みから一部の圃場では寒傷みやモザイク病の被害が発生し、今後の収穫量への影響が懸念されている。価格は、製造工場作業者などの新型コロナウイルス感染症による、急な欠員や外国人実習生の確保が難しくなっており、人員不足が深刻化している。このことから、人員確保のため、人件費は上昇しており、加えて光熱費や資材などの上昇も影響し、生産コスト上昇に伴う製品価格の値上げが行われている。ほうれん草の生産は４月末まであり、今後の生産状況にもよるが、令和５年度価格は強含みで推移していくと予測される。

エ　冷凍みかん（国産）

令和４年度産温州みかんは、九州では「裏年」和歌山県や静岡県では「表年」にあたり、全体の収穫量は令和３年度産より約７千トン下回る74万２千トンとなる見込である。九州産のサイズは着花数が少なかったことで、１つ１つの実に栄養が行き渡るようになり、大玉傾向となった。特に２Ｌ～３Ｌの数が多くＳ～Ｍサイズの収穫量が少なく、糖度は例年並みで酸味が平年より強いことが令和４年度産の特徴である。令和３年度九州産は傷が多く見られたが、令和４年度九州産は台風の影響がほとんどなかったため、傷は少なく、九州産青果向け価格は、例年なら25～30円/個で推移するが、令和４年度産は40円/個となり高騰している。そのため、令和５年度価格は高値が予測される。

6　保護者負担の学校給食費

令和５年度の学校給食費は、令和４年度当初と比較して、自校炊飯では8.6％、委託炊飯では8.8％程度の増額を見込む必要があると予想される。

表１　学校給食費の平均月額

区分 ＼ 年度		28 年度		30 年度		3 年度	
		平均月額(円)	上昇率 (%)	平均月額(円)	上昇率 (%)	平均月額(円)	上昇率 (%)
全国平均	小	4,323	0.5	4,343	0.5	4,477	3.1
	中	4,929	0.2	4,941	0.2	5,121	3.6
岡山県平均	小	4,691	△0.5	4,775	1.8	4,819	0.9
	中	5,285	△0.2	5,371	1.6	5,557	3.5

表２　令和４年度１食当たりの平均価格

区　分	小　学　校	中　学　校
主食(米飯・パン・めん)	48 円 53 銭	56 円 80 銭
牛　乳	56 円 30 銭	56 円 30 銭
副　食	177 円 39 銭	214 円 36 銭
合　計	282 円 22 銭	327 円 46 銭

(注)岡山県教育委員会調査の一食あたりの平均単価をもととした岡山県学校給食会の推計。

表３　学校給食費の内訳別上昇見込率

区　分	小学校			中学校		
	令和４年度構成比(%)	令和５年度見込比率(%)		令和４年度構成比(%)	令和５年度見込比率(%)	
		自校炊飯	委託炊飯		自校炊飯	委託炊飯
主食(米飯・パン・めん)	17.2	104.3	105.4	17.3	104.3	105.4
牛　乳	19.9	109.6	109.6	17.2	109.6	109.6
副　食	62.9	109.5	109.5	65.5	109.5	109.5
合　計	100.0	108.6	108.8	100.0	108.6	108.8

(注)　1.岡山県学校給食会で独自に推計したものである。
2.主食の週当たりの実施回数は、米飯 3.00回　パン 1.31回　めん 0.69回　と推定した。
3.牛乳は令和４年度期中値上げ２円を県補助金で対応したが、令和５年度は補助予定がないため大幅な値上げが予想される。
4.副食は、それぞれ原料等の動向により値上げ幅は異なるが、現時点での単純平均変動を推計したものである。